

ずいそう

意外な程に冷静？

渡 邊 学



「X○△▽?○」

誰かがドアを叩きながら何かを叫んでいるので目が覚めた。辺りは暗闇。枕元の時計を見るとまだ5時にもなっていない。寝ぼけ眼を擦りながらドアを開けると、ホテルの従業員の制服を着た初老の女性が、ロシア人にありがちな頑丈な体型に相応しい野太い声で、何か怒鳴っている。ただ事ではないと思った瞬間、きな臭いにおいが鼻を突き、「火事だ!」と気付いた。

2001年5月、中央アジア・カザフスタンのホテルに滞在中の私は、どうやら逃げ出した方が無難かなと思い、身仕度を始める。不謹慎な話ながら、これで帰国時の武勇伝が出来るかもとちょっと嬉しかった。あんまりきちんとすると、武勇伝としての緊迫感がないかなと思う余裕がまだあり、靴下だけは履かずにパスポートやタバコ等必要なものだけを身に着けて廊下に出る。当然、エレベータは止まっているので、10階の自室から非常階段を駆け下りていく。

5階まで下りてくると、その先は既に煙が充満しており、とてもじゃないが先に行けない。さすがに「ヤバいかな」とその時初めて感じた。仕方がないので、ドアが開放されているのが目に入った5階の客室に飛び込む。そこにはすでに先客が5-6人いて、窓から下を覗いている。たまたまホテル玄関の車寄せの上に大屋根が設置されており、客室の窓からその大屋根までの高さは約4m。飛び降りるには高すぎるので、先客と一緒にベッドシートとカーテンを結んで簡易ロープを作り、それを使って窓から下の屋根へ順番に降りていく。またまた良い話のネタが出来たと内心ほくそ笑む。

大屋根の上には既に相当数が避難してきていて、下をのぞきこんでいるが、流石に4階ほどの高さがありどうしようもない。幸いしばらくするとはしご車がやってきて、大屋根に梯子を掛けてくれた。「女・子供を先に降ろせ。」と皆で声を掛けあう(外人客が多かったようで、英語でみんな話していた)。整然と避難をしていたが、突然初老の英国紳士(英語がそんな訛りだった)が「すみません。先を急いでおります。」と言いながら、横入りしてきた。やっぱり我ながら普通の精神状態ではなかったのだろう。『ああ、この人は急いでいるんだな。』と変に納得して私の番を譲っ

たが、よく考えたら私も決して急いでいなかったわけでは無かった。はしご車のはしごは決して使いやすいものではなく、高所恐怖症気味の私としては非常階段で一瞬煙に巻かれた時より、はしごを降りる時の方が怖いくらいだった。

ようやく地上に降りてホテルを振り返ると、火の手は見えないが煙は盛大に吹き上がっていた。愛煙家の私は緊張が解れてタバコを吸いたくなったが、周囲の避難客の誰も吸っていないのを見ると、流石に率先して火をつけることもできない。まずは持ち出した品の確認と思い、パスポート・タバコと来て財布を入れたはずのポケットを探ると、財布の代わりに夜食に買っておいたチョコバーが出てきた。自分ではあれほど落ち着いて行動したつもりだったのにと、ちょっと可笑しくなった。

そのうちどこかで一人がタバコに火を点けると、私のように火事場での喫煙に躊躇していた者どもが、一斉にタバコを吸い始めた。どこの国の人間も考えることは同じである。そして、ホテルだか消防だかが手配してくれたバスで、別のホテルに取敢えず収容され、そこから当時の上司に国際電話を入れて事情を説明。出張を切り上げ、いったん帰国することで了解を取った。

後日のBBCの報道によると、この火災で4名の犠牲者がでたとのことであった。幸い私自身はその日の午後、無傷の自室からすべての所持品を無事回収することもできたが、その報道を見るに結構紙一重のところであったのだと改めて思った。

しかしその場面・時点ではまるで自分が映画の主人公にでもなったような気がして、それなりに人間は落ち着いていられるものだとも思った。この以前にアフリカ駐在中駐在国でクーデターがあり、軍隊の検問を通るたびに機関銃の銃口をこめかみに着き突けられた時も、なぜだか自分は大丈夫だと思い、落ち着いていられたと思う。危険・危難に際してはまずは落ち着いて行動することが重要なのだと思うが、そのためには自分を客観的にみるべく、すべて映画の中の出来事と思うことが結構有効なのではないだろうか。もっとも、それ以来ホテルの高層階への宿泊は避けるようにはなった私ではある。